

校長先生の初恋物語

第20話 とっくんVS足長君 決着の時

ボールは、まっすぐ向かってきました。おそろしいボールでした。でも、とっくんは、にげません。足長君の、あんなにかっこいいたいどを見た後に、にげるなんてできません。とっくんは、勇気を出して、ボールに向かっていきました。

「バシッ。」

ボールはとっくんのおなかに当たりました。ボールが当たったおなかは、はれつしてしまっただけではと思ってしまいうくらいいたかったです。胃ぶくろやしんぞうは、口からとび出しそうでした。そして、ボールは……。

なんと、あります。ボールは、地面にころがってはいません。ボールはとっくんの手の中に、しっかりとありました。とっくんは、足長君の本気で投げたボールをキャッチできたのです。

「すごいだちょー。とっくん、足長君の本気ボール、とっちゃっただちょー。」

きんに君が大よろこびしていました。ダンプさんは、

「とっくん、大好きー。」

とさけんでいました。よしこさんだって、

「とっくん、かっこいいー。」

足長君は、おどろいていました。口は、ポカーンと開いていました。まさかとっくんが、本気で投げたボールをキャッチできるなんて、思っていなかったのでしょう。投げ終えたポーズのまま固まっていた。チャンスです。足長君をぶち当てる大チャンスです。

「次は、とっくんの番だちょー。足長君を当てちゃえーっ。あちょーっ。」

きんに君の言葉に、とっくんは力強くうなづき、ボールを持ったまま、足長君に向かっていきました。



「いくぞ。足長君。今度はぼくの番だ……。」

足長君は、ようやく我に返り、はっとして、あわてて後ろに下がっていきました。こんなにあわてながらにげていく足長君も、見たことがありません。そのあわてっぷりに、とっくんは、「勝てるっ。」と確信しました。

「ウォリャー————ツ。」

とっくんは、すべての力をボールに込めて、投げました。



勝負は終わりました。昼休みが終わり、みんな校舎にもどり、そうじを始めていました。でも、とっくと足長君は、ドッジボールのコートの中にいました。とっくんは、鼻血を出していました。足長君はその横で、とっくんの鼻血が止まるのを待っていてくれました。足長君が言いました。

「やっぱり俺の勝ちだったな。」

とっくんの投げた「たましいのボール」は、足長君があっさりキャッチして、そしてそのあと投げた足長君の、さらにパ

ワーアップした「スーパー本気ボール」は、とっくんの顔面にちょくげきして、とっくんは鼻血ぶーでした。くやしいことに、とっくんの完敗です。足長君はそのあと、こんなことを続けて言いました。

「でも、オレが本気で投げたボールをとったのは、とっくんが初めてだよ。とっくんも、やるじゃん。」

その言葉に、なみだが出るほどうれしくなりました。「足長君って、いい人だったんだなあ。どうして今まで気づかなかったのかなあ。」足長君と友達になったのは、そのしゅんかんでした。

「足長君、次はぼくが、当ててやるよ。」とっくんはかっこつけて言いました。そのまま空を見ました。UFOが飛んでいました。つづく

次回予告

恐怖のほらあな

